

美馬市木屋平の習俗

—紋日の行事としきたり—

民俗班 (徳島民俗学会)

澤田 順子*

要旨：市町村合併により、美馬市の一員となった旧木屋平村は穴吹川に沿った南北に長い山間地域で、南には県内一の高さを誇る剣山が控えている。山の深さが違うかもしれないが、隣接している昨年度の調査地東祖谷と比べると、現状の過疎と高齢化（木屋平の高齢率60%）は同様でも、古くから神山や穴吹地域などとの人や物の交流もあり、木屋平独自の暮らし方がみられる。産業は主に林業、農業で、山での作業は厳しい。紋日は住民の待ち望むハレの日であり、地域の人たちの連帯を強める場でもあった。人々が楽しみにしていた紋日の供物・食物に視点を当て、しきたりを調査する。

キーワード：紋日、行事、供物、食

1. はじめに

紋日とは『民俗学辞典』の紋日を要約すると「紋日とは物日、関西地方では訛ってモンビとなる。また紋は紋付からきていて、晴れ着を着るような特別な日であり、年中行事と同意義と考えられる。この年間の折り目の日は、家々で忌み謹んで神を祭るのが本来の伝承的習俗で生活にリズムを与えていたが、仕事を休んで楽しむ日と変化している」とある。

木屋平で話を聞いた女性たちは「①紋日は上手くできていて、農作業の忙しいときでも大体2ヵ月置きにあった。今では地域の人が集まって行事をすることも、昔のしきたりを引き継いで行っている人も少なくなっている。②子どものころは楽しみだったが、今は面倒なだけ」という。かつて紋日の行事は単調な山の暮らしにメリハリを与え、地域の連帯を強固にする手段であった。しかし、生活環境の変化は次第に紋日のしきたりを消していつている。

紋日の行事は①地域全体でする（祭りなど）、②組内（講中）でする（地神さんなど）、③家ごとで

する（正月・節句など）などがある。

調査方法 紋日の行事のしきたり、特に食に視点をあて、聞き取り調査を主に『木屋平村史』、『改訂木屋平村史』等を参照してまとめた。協力者の大半は、昭和初期生まれ、中学を卒業すると、高度経済成長の流れもあって都市部に就職するか、徳島・穴吹などの高校に進学し、寮や下宿生活を送り親元を離れている。しきたりを守っている人から、筆者と共に教えてもらう人もいた。

木屋平も広く、地域によってしきたりも異なっている。出合った方たちに、これまでの暮らしの状況を語ってもらうことで全体的な風習を知り、山に囲まれ独自の風習を伝承している今丸地域での経験と、婚家先の川上地域との違いを梅津久子さんに聞かせてもらった。

紋日の中でも新しい年を迎える正月行事は各地域・家々で行われているので紙面を費やし記すことにした。また『改訂木屋平村史』に書かれた行事から、引用もさせてもらった。

* 徳島市丈六町長尾62-8

2. 12月の行事

1) 正月迎えの準備

門松 「門松にする松は三クルマ（3段枝）の若い松の木を二本切ってきて門の両脇に立て注連縄を張る」（村史）。家によって立てる場所が違う。昭和30年ころまではしていたそうだ。

注連縄 注連縄は、カラワラ（打っていないワラ）で縄をない、1本・5本・3本に纏めたワラを縄に挿して吊り下げ、中央には裏白を付ける。門松と同様に注連縄を張る場所も家によって違っている。入り口・神棚・仏壇・えびすさん（台所）・牛小屋・泉（井戸）・便所などに飾る。

飾り松（餅花） 枝振りのよい老松を天井からつるし横に泳がせて餅花や飾り物をつける。

料理の準備 正月の1週間前には、農家で自家栽培したコンニャクイモでコンニャクを造る。清水に浸けておき正月1ヵ月間の料理に使った。トウフも各家で造っていたが、昭和30年ころ豆腐屋ができ、自家栽培した大豆と交換したり、買うようになった。そのころになると、他の正月用の食材も神山などから馬車や自転車で売りに来るので買うことができた。しかし一般的に言われているような「おせち料理」は作っていない。

餅つき 「1年に3回、正月と節句と祭りに餅を搗く。正月餅はたくさん造り、もち米1俵（60kg）、粟・キビなど30kgくらい搗くのが普通であった」（村史）。現在では家族も減り、餅の量は少なくなった。

2) オオツゴモ（大晦日のこと）の食事

朝食はいつも通りだが、昼ごろにヨウメン（夕飯）といいオセチを食べる。オセチはしょうゆ仕立ての具が多い汁のことで、カブラ・ニンジン・ゴボウ・ヤマイモ・刻みコブ・トウフ・アブラゲなどを入れる。一般に言われているオセチ料理ではない。夕飯時には夜食の手打ちの年越しそばを食べる。できるだけ陽がある内に一日の食事を食べ終えてしまうのは、来年の仕事がはかどるよという願いを込めているそうだ。夜食までに家族全員が風呂にも入る。夜食後、正月神さんのお供えの準備をする。

お供え物 お正月さんのお供え物には、おもち、サトイモ、干し柿を神仏の数だけ用意する。床の間

には天照大神の掛軸を始め、その他の神々を飾る。三宝に^{ふたまただいこん}二股大根・干し柿・米・ダイダイ・扇子等を載せて祀る。二股大根は縁起がよいといわれている。これで正月を迎える準備が整う（今丸地域）。

3. 1月の行事

1) 正月 元日

若水迎え 早朝に当主が起きて若水さんを迎えてくる。注連縄を付けたチョウケ（手桶）に入れておいた少量の大豆・米（干し柿を入れる所もある）を泉（井戸）に投げ入れてから、水を汲む。その水で湯を沸かし神仏に供える。火をつける音を聞きつけると家族全員が起きだし、若水を使って食事の準備をする。

家族は正装し揃って神仏を拝み、新年の挨拶を交わし、朝食となる。仏壇から三宝を下げてきて、まず干し柿「年取り柿」を当主から順に取り回して食し、お茶を飲む。次に餅（切り餅を焼く）を食べる。それが終わるとご飯と雑煮（味噌汁）を全員に配る（今丸地域）。

雑煮 「大きな椀にイリコ出汁で味噌仕立て、ジイモ（里芋）の親イモを半分に分けて入れ、トウフを載せ、その上にねぎを3本載せる。この雑煮は本村独特のものである」と『改訂版木屋平村史』に記載されている。

門わけ（門明） 「早朝氏神さんに初参りに行き、近所・株内にあいさつ回りをする。」古くは挨拶に訪れた家へ雑煮をご馳走になっていたそうだ。

2) 2日

①書初めをする。②農家では歟初め「さくぞめ」をする。早朝家族一同が畠に出て当主が穴を掘り、干し柿・米・粟・餅を穴に入れ、家族が順に土を掛けて埋める。3本のカジガラ（楮）を掘った穴を囲むように立て、先を結ぶ。竹の先に紙を切って作った御幣・若葉を挟んで立て、お神酒を供え豊作を祈る。③買い初めに行く。

正月3ヶ日は掃除・洗濯をしてはいけない。1年中バタバタするようになる（今丸地域）。

4) 7日正月

畠にある菜っ葉（白菜など）を入れ、そば米汁を作り神仏・泉に供える。これを食べると病気になる

ないといわれている。7種の菜を入れた七草粥や雑煮・オセチを供える家もある。

「^{おおやまづみの}大山祇^{みこと}命祭」山の神の祭り 木屋平は山の仕事が多い。山林労務者は仕事を休み、山の神の祠にお神酒を供え、一年の安全を祈る。

5) 8日 お帳とじ

お供え餅でぜんざいを作る。

6) 13日 若餅を搗く

正月神様を送るときのお供えとする餅で、14日夜にお供えをする。

7) 15日 正月の神送り

三宝にお祀りしていたお米を入れて粥を炊く。粥を神仏に供え、灯明をあげて家族で拜む。粥・注連縄を下ろし、集めて焼く。正月神は煙に乗って帰られる。それが済むと家族は食事をする(川上地域)。

ウツゲで杖を作り、お弁当にお粥を炊き、夜が明けない内に当主が正月神さんを送る。提灯を下げ弁当を持って家を出るとき「正月神さん、いなかえ」と言う。三つ辻迄来ると杖を道に挿し、お粥の弁当を挟んで「また来年も来てよ」と神を送る。当主が家に帰ってくると皆でお粥を食べる(今丸地域)。

10) ひしとい正月

旧暦2月1日に農家は仕事を休み、ご馳走を作る。この日で正月は終わる。

4. 2月の行事

1) 節分

日が暮れない内に家に帰らないと鬼に会うと言われ、夜は外へ出られなかった。鬼が入らないように家の外の柱にイワシの頭をヒイラギの葉で包んで立てた。夕飯用にヒイラギでお箸を作り、食べ初めをした。イワシ、コンニャクの白和え(砂下ろし)・オセチ(大晦日と同じ)を食べる。一升枡に入れた炒った豆を家の中から「鬼は外」と言って撒き、外から「福は内」と言って撒く。家の中に撒いた大豆を踏んだり、上に座ったりするとネブチ(デキモノ)ができると言われた。歳の数だけ豆を食べ、家族の夕飯が済むと、当主はお膳にご飯とオセチをそれぞれ碗に入れて牛小屋に行き牛の餌の上に載せて食べさせた。牛のオセチといった。

お正月と節分には「セチン(雪隠便所)の神さん」

にお供え物・お神酒を祀り灯明を上げた。残った豆はその年の最初の雷が鳴った時に食べると雷除けになると伝えられている(今丸地域)。

2) 初午

旧2月の最初の午の日に厄祝い・還暦の祝賀をする。蚕がよく育つように繭型のダンゴを作る。

5. 3月・4月の行事

1) 上巳の節句 雛祭り

節分が済むと大安の日に雛を飾る。雛を飾る家は少なかった。菱餅・ヨモギを入れた草餅を祀る。初節句の家では祝いの席を設けた。3日の夜人形を片付ける。娘の縁付きが遅くなるとのいわれがある(旧暦で行っていた)。

2) 彼岸

春と秋 先祖をまつる行事を各家で行う。入り日・中日・終り日には墓参をしない。

3) 社日

お地神さんともいう。春と秋にあり、農耕は禁止の日である。立春から数えて第5^{つちのえ}の戌の日を「春の社日」、秋分に近い戌の日を「秋の社日」といって土の神5神を祀り、五穀豊穡を祈る(春はごはん秋はサツマイモ・サトイモを供える)。

6. 5月の行事

1) 端午の節句

4月に入ると、大安の日に5月人形を飾り、鯉のぼりを立てる。昭和初期までは強くなって欲しいと鐘馗^{しょうき}・加藤清正・金太郎等の絵を描いた幟を立てた。チマキ・柏餅・赤飯などを作りお祝いした。屋根にはショウブ・カヤ・ヨモギを束にして部屋の数だけ置き、火災など家の災難がないように願った。ショウブ湯もする。

鯉のぼりは小学校へ上がる前まで立てた。

7. 7・8月の行事

1) 剣山大祭「つるぎえ」

木屋平は信仰の山、剣山への登山路に当たり「つるぎえ」といって7月15~17日のお山開きの祭りが全山各神社で行われた。法螺の音と共に白衣の行者や、信者が集まってきた。川上地区や川井・谷口の

宿屋は大繁盛だったそうだ。この風物詩も道路の整備と共に無くなり、昭和40年ころになると車が通過するだけになってしまった。

2) 虫送り

各地域で行われていた行事で、稲・粟・豆類・野菜につく虫を竹筒に入れ、寺に持って行き住職に害虫退散の祈禱をしてもらった。その後、竹筒を地域境の山に捨てて害虫を追い出す。農薬などのない昭和初期迄の行事であった。

3) 七夕まつり

旧暦で行っていたが、今は暦通りに行っている。
①各家で短冊を笹竹に吊るす。②短冊に書く硯の水は里芋の葉にたまった露を集めて墨をする。③6日の夜ナス・トウモロコシ・ダンゴをお供えする。④7日の朝早く川や谷に流す。⑤お供え物を女の子は食べてはいけない。星の数ほど子が生まれるから。⑥スイカ・キュウリなど水分の多い物はお供えしてはいけない。七夕様が水に流されるから(今丸地域)。

4) 盆 盂蘭盆(旧暦で行っていたが、現在は8月)

①13日夕方精霊を迎え、14・15日仏壇で祀る。②14日お団子・果物を供える。③15日八寸膳にソウメンを供え④16日ソウメンとソウメン汁を供える。仏様はソウメンに乗って帰られるという(今丸地域)。

「新仏のある家」は①七夕の日から灯笼に火を点す。②3年間盆の14日に火とぼしの行事をし、親類を呼んで供養をする。ナスビ・サトイモ・米を入れた供え物を青竹の棚に祀る。火とぼしは肥え松を細く割り、ハギと麦わらを少量入れて束ねたものを108束作って燃やす。竹がポーンと大きな音を発すると「仏様が帰ってきた」と言った(今丸地区)。

8. 9・10・11月の行事

1) 秋の彼岸 春と同様に先祖祭祀をする。

2) 秋の社日 この日からサツマイモを掘る。

3) 祭り 10月13日から28日まで村内各地で氏神さんの祭りがある。地域によって異なった行事をしている。紋日の中で一番待たれたのは祭りだったと声が多い。祭りのご馳走は、サカナの姿寿司だったという。サカナは何かと問うが、覚えていないという。結局アジではないかということになった。無塩の魚はなかなか手に入らない時代、魚を食べる楽

しみの日でもあった。

4) おいのこさん

旧暦10月の亥の日が初の「おいのこさん」。年によっては3・4回もある。農家では初の亥の子に収穫を感謝する農耕儀礼の行事を行う。春、田に降りた神が仕事を終え山に帰られるという伝承もある。亥の子餅を搗き、ユズのおすし(かきませ寿司)を作る。来年は一杯にできるようにと1升枥に寿司を八分目入れて神に祀る。その他葉つきのユズ・ダイコンも供えた。

子どもたち(男の子)は「いのこボテ」を作って家々を回り、お金や菓子をもらって歩いた。「いのこボテ」は里芋の茎、ズキを心にしてワラで包み、縄で巻いたもの、土を叩くとよい音がする(村史)。家々の庭先で歌を歌いながら土を叩いたそうだ。

一に俵をふんまえて	六は無病息災に
二にはにっこり笑おうて	七つ何事ないように
三に酒を作らせて	八つ屋敷を踏み広げ
四つ世の中ええように	九つ小倉を建て並べ
五ついつものごとくなり	十でとうとう取まった
エートーエ エートーエ	(剣山ヒュッテで新居綱男氏に聞く)

9. おわりに

紋日のしきたりは、豊作になるよう神仏のご加護を祈り、収穫の感謝を表すものであり、長い年月をかけ生活の中で出来上がったものだった。社会の変革は、その込められた祈りを失い、忘れられて、形骸化されて継承されている。民俗の中でも、特にこの「しきたり」の分野は消え行く方向にある。

木屋平では、どんな行事でも季節の物を入れた「ませ寿司」、「そばきり」を作る。自家製のこんにゃく料理、トウフ料理は今も受け継がれている。

昔を思い出しながらの話は、楽しかった。

協力してくださった次の方々にお礼を申し上げる。

柿平 実・鶴子、若宮宇佐子、広瀬隆一、梅津久子、奥坂能久、鍛冶屋欽一、島 元治・ウタコ、安石フジカ、松家ゲンコ、天田テル、奥森町枝、藤田咲子、松田マズ子、新居綱雄・重子 (順不同 敬称略)

文 献

三木寛人編集(1971):『木屋平村史』
木屋平村史編集委員会(1996)『改訂木屋平村史』
民俗学研究所編(昭和26年)『民俗学辞典』